

曹洞俳壇

選・村松五灰子

包丁研ぐ鋼の匂ふ水の秋

千葉県 鈴木 英子

評 水の秋という美しい語感と、研げば匂い来る鋼。

鋭く透明感のある緊張が秋水のふさわしい句となった。

遠雷や病みたる妻に添寝して

広島県 豊田 和司

評 ご年配のご夫婦なのか。病むという心細さに迫って来る

雷音。そんな妻への労りがこの句の骨頂である。

◆三尺寝さあこれからと言うときに 東京都 伊奈 三郎

◆名月や平凡に生き趣味に生き 埼玉県 橋本 永子

◆暮洗ふ風樹の嘆を今も尚 静岡県 佐野 和彦

◆銀漢に先ず君渡る吾を残し 和歌山県 田崎よし子

◆晩学の絵筆洗ひて夕端居 福島県 佐藤 宜夫

◆燈下親し捲れば祖父の蔵書印 神奈川県 小野沢邦彦

◆跡取りの居ぬ家増えし浦祭 秋田県 小田篤恭業

◆原釜に廃炉早まれ鱈雲 福島県 大槻 弘

◆滝音や孤独の母を知る齡 静岡県 村松 保子

◆信濃路の林檎の籠をトランクに 新潟県 星野 三興

◆レジ袋二つを下げて片かげり 東京都 長谷川 瞳

*選者吟

除夜の鐘撞きては呼吸整へて

五灰子

*作句小見

自分が歩いてきた歴史に自分なりの意味を見いだして行く。自分の足や目で確かめた事で俳句を作る。それが俳句の楽しみでもあります。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

亡母の服すべてが似合う娘なり経る歳月に
よろこびもあり
宮城県 小田島麻利

評 亡くなった母の服を大切に仕舞っていた作者なのだろう、歳月を経てその服が似合ってきたことによるこびを感じて、下の句のような表現が生まれた。服は和服ともとれるので、洋服と限定することもない。母と娘の情愛が濃やかである。

新しき墓石に造花供へられ雨の朝を心は渴
く
奈良県 横井 正子

評 造花は枯れて萎れることはないけれど、墓前に供える花は、やはり新鮮で瑞々しいものが多い。その造花を雨が濡らして降る情景に、作者の心の渴きが重ねられる。

盆おどりさえも無かりき故郷を捨て来て施設に遠花火聞
く
兵庫県 前田あつ子
◆参道の石灯籠の耐震の支へは老いの杖つくことし
岐阜県 後藤 進

◆子の遊ぶ姿なき川夏の日を道をさがして水にふれむと
滋賀県 三田 和子

◆土起こし作物つくる明け暮れの君のつなぎの破れ繕ふ
秋田県 小松 紀子

◆朝の歩のみやげとなさん畦草にまじる露草清しく映えて
愛知県 田中 澤子

◆一滴の墨しみてゆく和紙の上心太く書きたり
山梨県 北村 富子

◆益行の汗しとどなる麻衣洗ふくりやに遠雷ひびく
大阪府 高畑 良圓

◆アイスショーのスポットライトが当たるなか四方八方影
北海道 吉田 洋子

◆ひとつずつ何かが消えるひとり居の今日は形見の紙人形
埼玉県 宮城 三春

◆余波の風に鳴る風鈴に共鳴し閉ざしし胸の障子が鳴れり
栃木県 土屋きみ江

*選者詠

祈るよりほかにすべなきこと増えて夫もわ
たしも言葉にはせず
ちづ

*作歌小見

宮城三春さんの一首、捜し物を捜しあぐねている様子が、はつきりと取めない結句に表れている。人の口に戸は立てられぬと噂話の止められないことを言うが、胸の障子を鳴らす土屋さんの表現の自在さにも注目した。



大本山永平寺



問答風景

坐禅

十二月八日は、お釈迦さまの成道（おさとりの日）です。菩提樹の下で七日間坐禅なされて八日目の「明けの明星」をご覧になられ、おさとりを得られました。そして「この世はすべて移ろいゆく。故に、わたしもわたし以外のものも思い通りにならない。思い通りにしたいという欲望に執着することで苦しみが生まれる」とお示しになりました。また、執着を離れるには「生活を正し、身と口と思いを慎み、心をおさめ正しく物事を見る智慧を養う。このことを忘れずに怠ることなく勤めなさい」とお教えです。

坐禅は「身を調べ、息を調べ、心を調べ」ただ静かに坐ります。道元禅師さまは「坐禅、坐禅、とにかく坐りなさい」と何度となくいわれております。なぜならば、「坐禅」は、お釈迦さまのみ教えがおのずと具わっているからです。ですから、どの仏さまも、どのお祖師さまも坐禅をなされました。

永平寺では、お釈迦さまに倣って十二月一日から八日未明まで坐禅（臘八摂心）を修行します。一週間、起床から就寝まで、足の痛みや睡魔に耐えながら一心に坐り続けた修行僧は、八日未明に思ったことや気づきを老師に問い、その答えをいただきます。

こうして修行僧は「坐禅」をすることで、お釈迦さまはじめ、道元禅師さまのおさとりを実践してゆくののです。



大本山總持寺



臘八摂心

十二月は、修行道場においてとても大切な月。

總持寺や永平寺をはじめ、全国の道場では一日より八日未明まで「臘八摂心」が修行されます。また全国の多くのお寺でも、この期間には住職や檀信徒の方々が坐禅にいそしみます。臘八は冬の季語にもなっていて、十二月八日のことです。

約二六〇〇年前のこの日、お釈迦さまはインド・ブツダガヤの菩提樹の下で、正身端坐しょうしんたんざしておさとりを開かれました。

その成道じやうどうを慕い、その教えをいただいで、早朝三時より夜九時までひたすら坐禅に打ち込むのです。

現在、總持寺では臘八の他、二月に「涅槃会摂心ねはんえせつしん」、六月に「伝光会摂心」、そして毎月「月例摂心」が行じられています。

總持寺開祖・瑩山けいざん禪師は、『瑩山清規けいざんしんぎ』にこの時期の坐禅を「長坐ちやうざ」（長時間の坐禅）として定められました。

この『瑩山清規』が二祖峨山がざん禪師はじめ歴代のお祖師方により各地へ伝わり、江戸中期に至って全国寺院が一週間の「長坐ちやうざ」すなわち摂心を修行することとなったのでしよう。

臘八摂心が終わると八日は「成道会」。これらの行持が一段落しますといよいよ「年窮歳盡ねんきゆうさいじん」となり、歳末から新年にかけての行持や大勢の年始参拝者をお迎えする準備となります。